

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2022 年 12 月 8 日 (金) 1 限 実施

第 3 回 考 査

千葉県立佐倉高等学校 第 3 学年 A～G 組

Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように5桁で記入してマークを忘れないこと。
例 3年D組1番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第1問 次の問い(問1~問7)に答えよ。(配点 22)

紀元前 2300~前 1800 年を中心に、現在の [1] の領内にあるモヘンジョ・ダロとハラッパーを二大中心地としてインダス文明が栄えていた。その出土品のなかには当時の宗教や慣習などを暗示するものがあるが、当時の思想を知ることは現段階では不可能である。この文明の終末とほぼ同じころ、アーリヤ人が西北インドに進入し、この文明の遺跡の近く、パンジャーブ(五河)地方に定着して、前 1200 年を中心に聖典『ヴェーダ』を編纂した。その後、前 500 年ころまでに主要なヴェーダ聖典が編纂され、いわゆるバラモン教の根本聖典が整備された。『ヴェーダ』の宗教は多神教であり、主として太陽神スーリヤ、火神アグニなどの自然神や、武勇神 [2] (帝釈天)、司法神(水天)のような擬人化された神などが崇拝されている。しかし多神教の世界に満足しえなくなった人々は、やがて、多数の神々は唯一の神がさまざまな形をとって現れたものであり、その唯一の神の異なった名称にすぎないという思想が生まれ、さらに神々をも超越した唯一の最高神あるいは根本原理の追究に向かい、後世インド思想の主流をなす一神教的あるいは一元論的思想の萌芽が生じる。有も無も超越した中性的原理「かの唯一物」タッド・エーカムからの宇宙創造を説く賛歌は、一元論思想の最初の明白な表現であり、ここにおいて『ヴェーダ』の哲学的思索は絶頂に達した。

前 500 年ころになると、社会的大変動を背景に、反バラモン教的な自由思想家が輩出したが、なかでも [3] はジャイナ教を、ゴータマ・ブッダ(仏陀)は仏教を創始した。ジャイナ教は相対的観察法ナヤに立脚して五実在体説という無神論的多元論を唱え、四姓制度を認めず、[4] を極端に強調し、苦行主義をとり、業を滅して解脱を求めるべきことを主張した。

問1 文章中の空欄 [1] ~ [4] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①~④のうちから一つずつ選べ。

[1] ①バングラディシュ ②インド ③アフガニスタン ④パキスタン

[2] ①バルナ ②インドラ ③ヤマ ④サラスヴァティー

[3] ①マハーヴィーラ ②プーラナ・カッサパ ③ウパーリ ④アーナンダ

[4] ①不妄言 ②不殺生 ③不飲酒 ④ 不邪淫

問2 古代インドで展開された思想についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[5]【2017年本試】

- ① ウパニシャッド哲学は、真の自己とされるアートマンは観念的なものにすぎないため、アートマンを完全に捨てて、絶対的なブラフマンと一体化するべきであると説いた。
- ② バラモン教は、聖典ヴェーダを絶対的なものとして重視していたため、ヴェーダの権威を否定して自由な思考を展開する立場を六師外道と呼んで批判した。
- ③ ウパニシャッド哲学では、人間を含むあらゆる生きものが行った行為、すなわち業(カルマ)の善悪に応じて、死後、種々の境遇に生まれ変わると考えられた。
- ④ バラモン教では、唯一なる神の祀り方が人々の幸福を左右するという考えに基づいて、祭祀を司るバラモンが政治的指導者として社会階層の最上位に位置づけられた。

問3 次の文中の空欄 [6] ～ [7] に入れるのに最も適当なものを、下のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

十二因縁では、原因と条件とを分析しつつ総合するという、一種の論理的反省のうねに [6] 説が立てられ、それはつねに人生の現実に関して語られる。すなわち、苦は老死により、老死は生によりと、その生起のあり方が探究され、その縁って起こる系列をたどっていった、渴愛に至り、さらには根原的な無知に相当する [7] に達する。この現実探究により種々の [6] 説があって、その完成態は 12 の部分を数える十二因縁である。

- [6] [① 唯識 ② 涅槃
 [③ 解脱 ④ 縁起

- [7] [① 無明 ② 無記
 [③ 無色 ④ 無相

問4 仏教における煩悩や苦についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[8]【2016年本試】

- ① 「無自性」とは、煩悩によって自分固有の本性を見いだせないでいる状態を指す。それを脱するためには、快樂にまみれた生活にも極端な苦行にも陥ることのない、正しい修行を實踐すべきだとされる。
- ② 人間は現世で様々な苦しみにあうが、なかでも代表的な苦として、生きること、老いること、病になること、死を目の当たりにすることの四つが説かれた。それらは「四苦」と呼ばれる。
- ③ 「三帰」とは、人間の有する様々な煩悩のうち、代表的なものを指す。それらは、貪りを意味する「貪」、怒りを意味する「瞋」、真理を知らない愚かさを意味する「癡」の三つである。
- ④ 人間の身心を構成する、「色」という物質的要素と「受・想・行・識」という精神的要素は、それら自体が苦であると説かれた。そのことは「五蘊盛苦」と呼ばれ、八苦の一つに数えられている。

問5 ブッダが初めて教えを説いた際に語ったとされている四諦についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[9]【2015年本試】

- ① 苦諦とは、人間は誰しも、苦しみを嫌い楽を求める心をもっているという真理を指す。また、集諦とは、そうした思いが積み重なって煩悩が増大するという真理を指す。
- ② 苦諦とは、人間の生の有り様は苦しみであるという真理を指す。また、集諦とは、そうした現実のゆえに、心の集中が妨げられ悟りが得られないという真理を指す。
- ③ 滅諦とは、煩悩の滅した安らぎの境地があるという真理を指す。また、道諦とは、そうした境地に至るための、極端に陥ることのない正しい修行法があるという真理を指す。
- ④ 滅諦とは、あらゆる存在はいつか必ず滅ぶという真理を指す。また、道諦とは、そうした道理を心に留めて、禁欲的な苦行を实践すべきであるという真理を指す。

問6 ブッダの示した修行方法である八正道についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[10]【2014年本試】

- ① 「正語」とは、ブッダの語った言葉を正しく記憶することである。
- ② 「正見」とは清らかで正しい生活を送ることである。
- ③ 「正精進」とは、肉食を避け正しく食事を取ることである。
- ④ 「正定」とは、正しい瞑想(めいそう)を行い精神を統一することである。

問7 仏教の実践としての慈悲の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[11]【2019年本試】

- ① 慈悲とは、四苦八苦の苦しみを免れ得ない人間のみを対象として、憐(あわ)れみの心をもつことである。
- ② 慈悲の実践は、理想的な社会を形成するために、親子や兄弟などの間に生まれる愛情を様々な人間関係に広げることである。
- ③ 慈悲の実践は、他者の救済を第一に考える大乘仏教で教えられるものであり、上座部仏教では教えられない。
- ④ 慈悲の「慈」とは他者に楽を与えることであり、「悲」とは他者の苦を取り除くことを意味する。

問2 下線部(a)に関連して、次の文章は、大乘仏教における「菩薩」の行うべき実践についてブッダが説いたとされているものである。ここで述べられていることについて、大乘仏教の思想を踏まえて説明した文章として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。
[14] (2014年センター本試験)

菩薩の道を志したものは、ここでつぎのような考えを起さなければならない。……
「彼ら(衆生)すべてを、私は、涅槃の世界に引き入れなければならない。しかもなお、たとえそのように無数の衆生を涅槃に導いたとしても、実はいかなる衆生も涅槃にはいったのではない」と。

それはなぜかという、もしも菩薩に衆生という観念が生ずるならば、彼を菩薩と呼ぶべきではないからである。それはまたなぜか。もし彼(菩薩)に自我という観念が生ずるなら、あるいは衆生という観念、命あるものという観念、個我という観念が生ずるなら、彼を菩薩と呼ぶべきではないからである。

(『金剛般若経』より)

- ① 菩薩はまだ仏ではないため、衆生の固定的実体をすべては把握できない。それゆえ、菩薩は、衆生を導く働きを放棄し、自分の悟りの完成を目指して努力すべきである。
- ② すべての衆生は、いかなる固定的実体ももってはいない。そのことを理解したうえで、菩薩は、導く自分にも導かれる衆生にも執着することなく、衆生を涅槃へと導くべきである。
- ③ 菩薩はまだ仏ではないため、衆生の固定的実体をすべては把握できない。それゆえ、菩薩は、まずは自分にとって身近な衆生から徐々に涅槃へと導くよう努力すべきである。
- ④ すべての衆生は、いかなる固定的実体ももってはいない。そのことを理解したうえで、菩薩は、まずは自分が悟りを開き仏となり、その後、衆生を涅槃へと導くべきである。

問3 次の文章中の [15] に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。(2003年センター本試験)

古代インドでは中庸に類する思想が、求道の場における実践の問題としても説かれている。ゴータマ・ブッダは、王子としての恵まれた生活と森林での苦行という両極端の体験を経て、快樂にも苦行にも偏らない中道こそが悟りへの道であると捉(とら)え、弟子たちへの最初の説法において、「二つの極端(二辺)に近づいてはならない」と語ったと伝えられている。この中道は彼の実践の特質を示すものであったが、後の大乘仏教の思想家 [15] に至って、すべての存在を等しく空であるとする思想の中で新たな意義を獲得した。

- | | |
|-----------------|----------------|
| ① ナーガールジュナ (竜樹) | ② ヴァスバンドゥ (世親) |
| ③ アサンガ (無着, 無著) | ④ ボーディダルマ (達磨) |

問4 次の文章中の [16] [17] に入れるのに最も適当なものを、下の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

大乘經典の嚆矢となるのが、『般若經』である。これは、『般若波羅蜜多經』の略称で、大小さまざまな經典群からなっている。名前の「般若」は [16] の意味である。「波羅蜜多」(パーラミター)は「最高の偉大性」,「完成」の原意から,「彼岸に到達すること」を意味するようになる。つまり, [16] によって人生の目的を完成すること, 彼岸に到達することである。パーラミターという文字は原始經典にも出てくるが, 大乘經典において六種のパーラミターに分類され, 菩薩修行項目の根本的なものとしてあげられる。たとえば, その第一にあげられる [17] パーラミターは, 他に与えることによって彼岸に達するという意味である。

- [16] ① 智慧 ② 解脱 ③ 嫉妬 ④ 憤怒
[17] ① 忍辱 ② 持戒 ③ 禪定 ④ 布施

問5 次の文の著者として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 [18]

大乘においては、三種の領域（欲界、色界、無色界）からなるこの世界はただ表象にすぎないものである。華嚴經典に、

勝者の子息（仏陀の弟子）たちよ、実にこの三界は心のみのものである。

とされているからである。心、意、認識、表象というのはみな同義異語である。ここに心と言われているのは、(それに伴って起こる心作用と) 連合している心のことである。「のみ」というのは、外界の対象の存在を否定するためである。

このすべてのものは表象のみのものである。実在しない対象が、(そこに) あらわれるがゆえに。あたかも眼病者が、実在しない網のような毛を見るように。

- ① ナーガールジュナ（竜樹） ② ヴァスバンドゥ（世親）
③ マハーヴィーラ（大雄（大勇）） ④ ボーディダルマ（達磨）

問6 密教について説明した次の文中の空欄 [19] [20] に入る語として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

密教はインド大乘仏教の末期（7世紀後半）ににわかに興起した一流派で、大乘仏教の思想や中観派、瑜伽行派などの思想を基盤とし、さらにヒンドゥー教の影響を受けて成立したものである。大乘仏教時代には、独立の密呪經典も成立した。それらの密呪經典には供養法、結界作壇法、護摩法や印契、陀羅尼、曼荼羅なども説かれるようになったが、それらは仏教の本流ではないので、それらを雑部密教（雑密）という。その後、650～700年ごろに『大日經』と『[19] 經』が成立し、密教的実践による即身成仏を強調したので、これを純粹密教（純密）といい、これをもって密教の独立とする。

従来の伝説では、真言密教は、[20] が自ら悟った秘密の法を金剛薩埵に授け、それからさらに龍猛、龍智へと伝えられたと説くが、歴史的には明確でない。

- [19] ① 華嚴 ② 金剛頂 ③ 般若 ④ 法華
[20] ① 釈迦如来 ② 空海 ③ 大日如来 ④ 恵果

第3問 次の文章を読み、下の問い（問1～問7）に答えよ。（配点 18）

西周から東周の春秋時代前半まで、古代中国の人々が法（のつと）るべき規範と仰いだのは、堯・舜・禹・湯・文・武といった古代先王の言葉である。そのために先王の言葉を収録する『詩経』や『[21]』は中国世界の人々が共通してその権威を認める典籍、経典の扱いを受けたのである。そこで、自説を述べて他人を説得しようとする場合、「先王の令に之有りて曰く」など、先王の言を引用して自説を補強するのが当時の知識人の常套手段だった。このように、

(a) 天から命令を受けて新王朝を開いた王者の発言こそが中国世界の人々にとって唯一の権威ある教えだった。

春秋時代の末期になると、周の封建的秩序がくずれ、諸侯は動乱の世を生きぬくために富国強兵につとめ、競って有能な政治家や思想家を求めた。こうした要求にこたえてあらわれたのが、諸子百家とよばれる思想家たちであった。なかでも後世に大きな影響を与えたのが、孔子を祖とする儒家と、老子・莊子を代表とする道家の思想である。

諸子百家というよび方は、春秋戦国時代にはまだない。諸子とは本来はもろもろの学士をさす。その本格的な学派分類は、司馬遷の父、談の六家（(b)陰陽家、儒家、(c)墨家、(d)名家、(e)法家、道家）、および班固の十家（儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縦横家、雑家、農家、小説家）に始まる。先秦時代の諸子に限っていえば、かかる後代の尺度による分類は、かならずしもその実態の把握に直結しない。なぜなら、いわゆる諸子百家のうち学派とよぶにふさわしい実質を備えていたのは、儒家と墨家の両派のみであったと推測されるからである。

問1 文章中の空欄 [21] に入る最も適当な語を、次の①～④のうちから一つ選べ。

- [21] ① 書経 ② 易経 ③ 楽経 ④ 礼記

問2 下線部(a)に関連して、天についての次の記述中の空欄 [22] に入る最も適当な語を、下の①～④のうちから一つ選べ。

中国で天の思想が高揚したのは西周時代である。前 1027 年に殷の帝国を滅ぼした周の王朝は、その王権を正当化するため、天によってくださった命令、つまり「天命」の説を唱えていた。しかし、天の神が地上を支配するという信仰は周独自のものではなく、殷代に信仰されていた「帝」も地上を支配する天の神だった。帝は意思を持つ天の神、雨を降らすことも、旱魃を起こして飢饉をもたらすこともできる絶対的な力を持つと考えられていた。この帝の意思を予見できるのが殷の王であり、[22] を行っていた。山や川の神、動物の神も降雨や日照りを左右すると見られ祭祀が行われていたが、旱魃を起こすのは帝であると考えられた。

- ① 亀卜 ② 礼楽 ③ 易占 ④ 風水

問3 下線部(b)に関して、陰陽五行についての次の記述の空欄【A】～【C】に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、下の①～⑤のうちから一つ選べ。[23]

『史記』によれば、【A】が燕の国に行くと、昭王は箒を手にして道を清め、弟子の座につらなり、学業を受けたいと請い、【A】はそこで『主運篇』を作ったとある。主運説は土を「和平用均、中正無私」として、四時を実輔するものとし、木・火を陽、金・水を陰として、五徳を陰陽に結合することによって、陰陽主運説を成した。【A】は、最古の黄帝から当代に至るまでの興亡の歴史が五行相剋の原理によって展開したと考える、いわゆる五徳終始説をとらえた。それゆえ土徳に当たる黄帝の次には【B】徳に当たる夏王朝が興り、夏王朝の次には金徳に当たる殷王朝が興り、殷王朝の次には火徳に当たる周王朝が興り、周に代わって天下を統一するのは【C】徳の秦である、と説かれた。

- ① 【A】 許 行 【B】 水 【C】 木
- ② 【A】 許 行 【B】 木 【C】 水
- ③ 【A】 鄒 衍 【B】 水 【C】 木
- ④ 【A】 鄒 衍 【B】 木 【C】 水

問4 下線部(c)に関して、次の文章は、墨子が理想と考える人間社会のあり方を説明したものである。【D】・【E】に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。[24] (2016年センター追再試)

墨子は、家族や国家を超えて、すべての人を無差別平等に愛する兼愛の必要を唱え、それは【D】によって実現できると説いた。さらに、人々が平和に暮らせる戦争のない社会を実現するためには、兼愛とともに【E】が重要であると主張した。

- ① 【D】 交 利 【E】 非 攻
- ② 【D】 交 利 【E】 平天下
- ③ 【D】 慈 悲 【E】 非 攻
- ④ 【D】 慈 悲 【E】 平天下
- ⑤ 【D】 中 庸 【E】 非 攻
- ⑥ 【D】 中 庸 【E】 平天下

問5 下線部(d)に関して、名家に関する説明文中の空欄[25]に入る語として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

恵施と公孫竜とは、その傾向を異にするものがある。荀子は正名篇においてすでにこれを指摘し、恵施の説を評しては「実を用ふるに惑ひて以て[25]を乱る」といい公孫竜の説を評しては「[25]を用ふるに惑ひて以て実を乱る」といっている。その意味は、前者は実体に即しつつ思想的に万物一体を説くことにより[25]を乱したものであり、後者は名称、概念にのみ重きを置いて実体にそぐわぬこととなったということらしい。

- ① 体 ② 言 ③ 名 ④ 記

問6 下線部(e)に関連して、法家の思想の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[26] (2010年センター試験改題)

- ① 人は先王によって定められた礼を身に付ければ争いを未然に防ぐことができ、各自が社会規範を守れば社会秩序は維持される。
- ② 天命によって天子となった者も、ひとたびその徳を失えば新たな有徳の者にとって代わられるが、その革命には武力も認められる。
- ③ 高い徳を積んだ人格者が政治に当たれば、その徳はおのずから国民を感化して秩序が保たれ、国家は安寧に統治される。
- ④ 厳正な法に基づく信賞必罰によって利己的な本性を抑止すれば、国民は罰を恐れて悪事をなさず、安定した国家統治が実現できる。

問7 次の文章を読み、孝についての韓非子の見方の記述として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[27] (2002年センター追試)

魯の人が、君主に従って戦場におもむき、三度の合戦で三度とも逃亡した。孔子がそのわけをたずねた。すると、「わたしには年老いた父親がおります。わたしが死ねば、だれも養ってくれるものはありません」とこたえた。孔子は、孝行者だと思い、上位に取り立てた。こうしたことからみると、父親にとっての孝子というものは、君主には逆臣なのである。

(『韓非子』)

- ① 孝は国家秩序と衝突するものであるから、為政者が孝を尊重するのは国家の混乱を招くだけである。
- ② 孝は国家秩序と衝突しないので、為政者が社会の秩序を維持するためには、何ら孝をめぐる政策を立てる必要はない。
- ③ 孝は国家秩序の基盤となる徳であるから、為政者が人民に孝を奨励すれば、君主への忠も同時に促されることになる。
- ④ 孝は国家秩序を超越した徳であるから、為政者は国家の利益にとらわれずに、人民に孝を奨励するべきである。

問3 文章中の [31] に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

(2009年本試験)

中国にあっては、老子は、「怨みに報いるに徳を以てす」と、怨みのある者に報復したいと思っても、人間としての徳をもって対応したいものだと言う。また、他者に対する思いやりを [31] と位置づけた孔子は、「直(ちよく)を以て怨みに報ゆ」と言ったが、これもまた自分に怨みを抱く者に対しても公平無私な態度で対応すべきであると解釈することができる。いずれも、復讐を肯定する当時の社会に警鐘を鳴らしている。

- ① 敬 ② 恕 ③ 仁 ④ 忠

問4 儒家の家族観についての記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

[32] (2017年センター試験)

- ① 孔子は、祖先に対する祭祀儀礼を批判し、生存している自分の父母や家族を最優先に考えるべきだと説いた。
- ② 『論語』では、父母に対する孝や兄に対する悌といった徳目が重視され、それらが仁の根幹であると説かれている。
- ③ 孟子は、基本的な人間関係を五倫としてまとめ、「父子」の間には「親」という関係が成立すると説いた。
- ④ 朱子学では、個人の修養や国家の安定などとともに、家族・親族の人間関係をうまく取り仕切る「齐家」の実践が要請された。

問5 儒教の「仁」と墨家の「兼愛」の相違を述べる文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 [33] (2004年本試験)

- ① 儒教の仁は惻隠(そくいん)の心に基づき、自他の区別を一切たてないが、墨家の兼愛は自分を捨て、他者のために利することを第一とする。
- ② 儒教の仁は弱者に対するものであり、まず女性や子どもに向かうが、墨家の兼愛はまず貧しい者に対するものであり、「憐れみ」と呼ぶべきである。
- ③ 儒教の仁は近きより始まるもので、まず近親に対するものであるが、墨家の兼愛は無差別の愛であり、親疎の関係に基づくものではない。
- ④ 儒教の仁は「忍びざるの心」と言われ、見過ごしにはできないという単なる気持ちだけが、墨家の兼愛は行動的な博愛主義である。

問6 次の論語の一文に堯舜の名があるのは何故か、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 [34]

己を修めて以て百姓を安んずるは、堯舜も其れ^そ猶^{なほこれ}諸を病めり。

- ① 堯舜の統治が優れていたことを示すため。
- ② 容易に実現できるものではないことを示すため。
- ③ 堯舜が理想的な聖人であることを示すため。
- ④ 解決することができない問題であることを示すため。

第5問 次の文章を読み、下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 14）

戦国時代に傑出した儒学者は孟子と荀子である。孟子は性善説によって孔子の倫理説を内面的に深め、また (a) 王道政治を唱えて孔子のいう徳治に具体案を示した。次に荀子は、人は生まれつきのままでは善になりえないとして [35] による拘束を重視し、また客観的な教学の整備に努めた。経書は、荀子を前後するころに五経のすべてが出そろったが、経書の学習を必須として教学の柱とすることは荀子に始まる。

宋代に入ると儒教の現状に対する反省から革新的な気運を生じた。北宋に始まり南宋の朱熹（朱子）によって完成する宋学（朱子学）がそれであって、五経にかわって (b) 四書を尊重し、倫理学としての本来性を取り戻す一方、それを宇宙論的体系のなかに位置づけるものである。朱子学は初め異端視されたが、士大夫の支持を得て隆盛に赴き、元代には伝統的儒教にかわって国教となり、以後清末にまで及んでいる。

明代になると王陽明（王守仁）の心学がおこり、官学化して精気を失った朱子学をしのぐ活況を呈した。[36] を説き、理は外にあるのではなくてわが心が理である、という徹底した唯心主義の論である。しかしその末流には、極端に走って読書を廃し、経書の権威を否定する風潮すら生じた。

問1 文章中の空欄 [35]～[36]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[35]

[① 徳	② 仁
	③ 法	④ 礼

[36]

[① 心即理	② 訓詁学
	③ 格物致知	④ 性即理

問2 下線部(a)に関して、王道政治についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[37]（2012年センター追再試験）

- ① 神秘的な事柄への関心を捨て、古来の儀礼を排することで、天と人を分離し、天の意志に左右されない人間中心の政治
- ② 武力による支配ではなく、人民の幸福を真に考え、まず生活の安定をはかり、そのうえで道徳的教化を目指す政治
- ③ 国家の規範として法律を定め、各身分の役割を明確にすると同時に、為政者による臣下の統制を国家の原則とする政治
- ④ 民衆からの過重な徴税を批判し、君臣の身分の区別なく、すべての人が農業に従事する平等な社会を目指す政治

問3 下線部(b)に関して、四書として**適当でない書名**を、下の①～④のうちから一つ選べ。
[38]

- ① 論語 ② 大学 ③ 礼記 ④ 中庸

問4 「孟子」に関する物語について、次の作品の著者として最も適当な人物名を、下の①～④のうちから一つ選べ。[39]

また『周のはじめ、武王、殷の紂王の暴虐を憤ってこれを討ち、ために天下の民を安らかにした。これは臣の身として君を弑したというべきではない。仁にもとり義にもとった一人の不徳者紂をころしたのである』ということが、『孟子』という書物に記されていると人づてに聞いております。だから、中国の書籍は、経典・史策・詩文にいたるまで、神意にかなって、わが国に渡来しないものはありませんが、『孟子』という書物だけはまだ日本に伝わっておりません。この書物を積んでくる船は、途中でかならず暴風に遭って沈没するからだといわれております。

それはどういうわけかという、わが国は天照大神が国の基をひらいてお治めになってから、皇孫の天子がたえることなく代々御位についておりますのに、もしこんな口先でいいくるめるような、ごさかしい教えを伝えることになると、後世には帝位を奪っても罪と思わないという賊子も出ることであろうと、八百よろずの神々がこの書物をお憎みになって、神風をおこして船を転覆させるのだということでございます。だから中国の聖賢の教えも、わが国の国風にてらしてふさわしくないものがすくなくありません。

- ① 上田秋成 ② 滝沢馬琴 ③ 本居宣長 ④ 賀茂真淵

問5 朱子学の「理気二元論」の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[40] (2006年追再試)

- ① 絶対無差別の真理である「理」が、相互に依存し合って生滅する「気」の動きとして、人間の心のうちに知覚される。
- ② 人間の本源的な生命力である「気」の働きが、その時々 of 行動の原理である「理」を、絶え間なくつくりだしている。
- ③ 人間を含む万物は「気」で構成されると同時に、その存在の根拠および道徳的規範が、「理」として賦与されている。
- ④ 普遍的な天の「理」と、場所によって異なる地の「気」とを調和させるのが、天と地の間で生きる人間の役割である。

第6問 次の文章を読み、下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 12）

問1 老荘思想における「道」に関する記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[41]（2004年追再試）

- ① 「道」は万物の根源であり、天地に先立って生じ、感覚では捉えられず、言葉では表現できないものである。
- ② 「道」は物事の筋道であり、個物や事象の有り様を決定づけるものであるが、それ自体としては言葉で表現することはできない。
- ③ 「道」は事物の自然な姿のことであり、相対的で多様なものであって、言葉での表現を超越している。
- ④ 「道」は絶対無差別な根源的世界の真理を意味し、無為自然を体得した人間にしか言葉で表現することはできない。

問2 老子の倫理説を説明する次の文中の空欄に入る最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[42]

老子の倫理説の目的は、知恵を用い技巧を用いている偽の世の中を脱して、淳朴なる古の状態に帰るのである。言い換えれば、限りある現象界を脱して、無限なる本体に合一するのである。[42] というものは天真爛漫でなんらの偽りもなく、なんらの虚飾もない。ちょうど道の無為自然なるがごときものであるから、老子は本体に合一することを [42] に復帰するといっている。

- ① 水 ② 嬰兒 ③ 牝 ④ 愚民

問3 文中の [43] に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。（1998年本試験）

中国の道家では、万物自然の根本が道と名づけられる。『老子』は「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」と表現し、[43] と規定する。加えて、この道は「天下の母」とも呼ばれ、自然現象を成立させるだけでなく、はぐく育み主宰するものでもある。また『荘子』には「天下を通じて一気のみ」とあって、生死すらも道における気の集散にすぎないものとして説明する。このように、中国における道の探求は、単に現象や存在の根本を追求するにとどまらず、超越的な原理のレベルにまで議論が及び、やがては政治・道徳とも結びついていく。

- ① 道は、万物との間に幾層もの断絶をもち、自然や自然現象を意志的に生み出すものである
- ② 道は、一から二、二から三という、人間の数学的思考によって生み出されたものである
- ③ 道は、段階的に人間をも含むあらゆる自然・自然物を生み出し成立させるものである
- ④ 道は、万物生成とは直接関係することなく分裂して細分化し、自己運動するものである

問題は次のページに続きます

問4 道家の代表的思想家莊子の思想を述べたものとして**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[44] (2006年本試験)

- ① この世界は、道がおのずから現れたものであり、そこには対立や差別はない。この認識に立ち、一切の欲望や分別から自由になった人が真人である。
- ② この世界は、道がおのずから現れたものであるので、己の心を虚にして、心身とも天地自然と一体になる境地が理想である。
- ③ この世界は、道がおのずから現れたものであるのに、人間がそれを有用だとか無用だとか判断するのは、自己の価値観に囚われているためである。
- ④ この世界は、道がおのずから現れたものであり、人間社会の秩序も道にかなっている。この認識に立った、社会規範にかなう行為が重要である。

問5 真人の在りようを述べた言葉として最も**適当なもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[45] (1997年追再試験)

- ① 上善は水のごとし。水は善く万物を利してしかも争はず。衆人の悪む所に処る。故に道にちかし。
- ② 己に克ちて礼に復るを仁と為す。一日己に克ちて礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すは己に由る。而して人に由らんや。
- ③ 生をよろこぶことを知らず、死を悪むことを知らず。その出づるもよろこばず、その入るもこぼまず。憮然(ゆうぜん:ゆったりとしたさま)として行き、憮然として来たるのみ。
- ④ 生まれながらにして之(道理のこと)を知る者にあらず。古を好み、敏めて以て之を求むる者なり。

問6 『莊子』には次のような説話が見られる。この説話が示す道の性質を述べたものとして最も**適当なもの**を、以下の①～④のうちから一つ選べ。[46] (1998年本試験)

南海の帝を儵といい、北海の帝を忽といい、中央の帝を渾沌といった。儵と忽とはときどき渾沌の土地で出会ったが、渾沌はとても手厚く彼らをもてなした。儵と忽はその渾沌の恩に報いようとして相談し、「人間にはだれ誰にも(目と耳と口と鼻の)七つの穴があって、それで見たり聞いたり食べたり息をししたりしているが、この渾沌だけはそれがない。ためしにその穴をあけてあげよう」ということになった。そこで一日に一つずつ穴をあけていったが、七日目に渾沌は死んでしまった。

- ① 道(渾沌)は、道に反する自己の功績や名声に執着しているような人間(儵と忽)には捉えることはできない。
- ② 道(渾沌)は、すべての人間がのっとるべき儒家規範であり、それに反する人間(儵と忽)には認識不可能なものである。
- ③ 道(渾沌)は、自分の世界にとらわれた人間(儵と忽)の経験的判断を超えたものであり、彼らには認識することはできない。
- ④ 道(渾沌)は、日常的な場での礼儀を重んじる人間(儵と忽)によってこそ、その本質が明らかにされる。

第7問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 12）

北アフリカ、西アジア、東南アジアを中心として世界中で広く信仰されているイスラームの [47] ムハンマドは、アラビア半島の商業都市メッカで生まれた。ムハンマドが生きた7世紀ごろのアラビア半島は、血縁関係を重視した部族制と多神教信仰の社会であり、部族間の争いや貧富の差など多くの社会的矛盾をかかえていた。そのような時代において、ヒラー山の洞窟でアッラーの啓示を受けたムハンマドは、神のことばをあずかる使徒として活動をはじめ、血縁・部族を超え、神のもとで万人が平等に生きる信仰共同体をつくることを目指した。

しかし、ムハンマドが語る神のことばでは、多神教や多神教崇拝は否定されており、メッカの人々には受け入れられなかった。そして、（有力者から迫害を受けたムハンマドは、622年にメディナにのがれたが、そこで信仰共同体である [48] を発展させたのちメッカを征服し、そこをイスラームの聖地とした。

問1 文章中の空欄 [47] ～ [48] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[47]

① 使徒	② 創始者
③ 天使	④ 救世主

[48]

① ウンマ	② シャリーア
③ ハディース	④ スーフィー

問2 イスラーム教の説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

[49] (2016年追再試)

- ① 来世は六信の一つとされ、終末の日に死者はよみがえり、神による最後の審判を経て、天国または地獄にいくとされる。
- ② 「アッラーのほかには神はない、ムハンマドは神の使徒(使者)である」と唱える信仰告白は、五行の一つとされる。
- ③ クルアーン(コーラン)は、歴代の預言者たちに下された神の啓示を、ムハンマドが集録し、編纂したものとされる。
- ④ ムハンマドはエルサレムで昇天したと伝えられており、エルサレムは、メッカ、メディナに次ぐイスラーム教の聖地とされる。

問3 イスラーム教についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 [50] (2018年センター本試験)

- ① クルアーンは、ユダヤ教の聖典に倣ってヘブライ語で著わされた。
- ② すべてのモスクでは、聖地エルサレムに向かって礼拝が行われる。
- ③ イスラーム教は、五行の一つとして喜捨(ザカート)の義務を定めている。
- ④ キリスト教徒らと区別して、イスラーム教徒は「啓典の民」と自称する。

問題は以上です。